

小学4年生の国語の授業だった。教材は「世界一美しいぼくの村」である。導入では、「すべてがなくなった？それとも残っているものはある？」と問いかけた。二者択一を迫られると、どちらだろうかと考える。それがよい。めあては、「戦争ですべてがなくなったのだろうか」だった。

「小グループをつくってしましましょう」と指示を出し、座席をグループにした。こうなると、自分の考えは書きにくくなる。グループになれば話し合ってしまうのである。座席の配置や座席を変えるタイミングにも気を配らなければならない。

この授業では、ワークシートを使っていた。ワークシートの記入欄の大きさは、どのようにして決まるのだろうか。ワークシートに実際に書き込む先生は、どのくらいいるだろうか。限られた時間の中で、効率的に指導するために、ワークシートは有効な手段の一つである。だが、作り方によっては、子どもの思考や学習過程を一律のものにしてしまったり、学習を受け身のものにしてしまったりする懸念もある。ワークシートの枠が、子どもの思考の枠組みと内容を規定してしまうことがある。

授業者は、ワークシートに記入することをもって学習が成立してしまうかの錯覚を抱いてしまうことがある。文章内容の確認または一言感想、穴埋めワークのような虫食いの長文に単語を入れる類のものでは、言葉の力がつかないことは明白である。ここには、文章を読み解くことの醍醐味である類推・想像の楽しさも、謎解きのスリルも、言葉の気づきや発見もない。ワークシートに、授業者が用意していない問いについて書けるスペースがあるだろうか。子どもの自由な思考を認める余地があるだろうか。ノートとの関係性はどのようなのだろうか。当たり前に使っているワークシートの功罪を、ちょっと立ち止まって点検・吟味する必要がある。

この授業では、なくなったものとなくならなかったものとを対比させていた。なくなったものに対しては、「悲しい」「暗い」とまとめていた。一方、なくならなかったものに対しては、「希望」としていた。

子どもたちは、自分の考えと比べながら、他の人の考えを聞くことで、読みを深めたり、広げたりしていたことと思う。できれば、その結果がアウトプットによりわかるとよかった。授業の最後には、授業者から「楽しく勉強できたなあと思います」という話があった。確かにそうなのかもしれないが、めあては何だったのかという疑問が残った。このようなことは往々にして起こる。授業者が、この教材文の主題などをどう考えているか、つまり、授業者自身が、どのような読み取りをしているのかがポイントとなる。

例えば、教材文を5回音読する、5回黙読する、視写する、書き込みをする、考えられる発問をどんどん出す、そこから発問を絞る。こういったことをすれば、授業者の読み取りはどうなるだろうか。授業が変わるのではないだろうか。これを研究授業のときだけでもやってみるのである。そうしないと、教材研究の質が上がっていかない。すなわち、授業が変わっていかない。

ワークシートだけでなく、低学年の吹き出しもそうだが、今まで当たり前にやってきたことを、一度立ち止まって見直すことが必要である。そのことが、授業改善にもつながる。